

編 集 後 記

雪氷学会員の皆様におかれましては、今冬の大雪や厳しい寒さの中で忙しく過ごされたかと思いますが、ようやく涼しげな風鈴の音が聞こえる季節となりより一層ご活躍のことと拝察いたしております。

さて、私は雪氷学会に入会し雪崩分科会所属して 10 年余りが経ち昨年 4 月より北信越支部の活動の記録と報告を皆様に広く伝えるべく、支部幹事方々のご協力のもと「支部だより」の編集担当をさせて頂いております。

私が学会員となつてからの 10 年余りを思い起こしますと、在住しております新潟県中越地方においては、平成 16 年 7 月新潟・福島豪雨、平成 16 年新潟県中越地震、平成 18 年豪雪、平成 19 年新潟県中越沖地震、平成 23 年 3 月の長野県北部地震、平成 23 年 7 月新潟・福島豪雨と激甚なる被害を被った自然災害に見まわりました。また、平成 17 年、平成 22 年、平成 23 年、平成 24 年においては、平成 18 年豪雪に匹敵するような大雪となった地域もありました。

特に、平成 23 年 3 月 12 日に発生した長野県北部地震においては、地震を起因とする雪崩が広範囲で発生しております。通常では、雪崩が発生する事のない斜面においても雪崩が発生し交通障害を引き起こし、さらに余震によって長期間に渡り雪崩の危険にさらされた状態でした。

もし、この地震が 2 月上旬の厳冬期に発生していたらと思うと、被害規模は計り知れません。この地震動と雪崩発生についての研究は、今後の研究課題となり解明されて行くでしょう。ただ、今すぐにできる事はこの現象に立会い、対応に奮闘した経験をより広く多くの人に伝えることが重要であると考えております。東北地方太平洋沖地震以降、日本全国どこで大きな地震が起きても不思議ではないと言われている今、少なからずとも雪崩対策においては日々の処理や対策が有効であった事が言えるからです。

中谷宇吉郎先生が書き記した寺田寅彦先生の警句「天災は忘れた頃にやってくる」には、日々の備えを怠らない事を警鐘しているものとされています。この言葉は、科学が進歩した現在もまさに防災の基本と言えるのではないのでしょうか。

今年 4 月に開催された、2012 年度北信越支部総会および研究発表会・製品発表検討会においては、「中谷宇吉郎没後 50 周年記念シンポジウム」に合わせて開催され、その功績を再認識する事が出来ました。このような支部の活動が今後も科学発展と防災に役立つことを切に思い、私もその一端を担わせて頂けるよう微力ながら全力で職務に精進努力致しますので、皆様方から今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(町田 敬)